角田光代　橋の向こうの墓地

この町の商店街にコロッケを売っている店は七軒あって、そのうち三軒は肉屋が扱っており、二軒は弁当屋、一軒は惣菜屋、のこりはコロッケ専門店で、おれはそのなかで、中島精肉店のコロッケが一番うまいと思っている。ころもがざくざくしていて、芋が甘くない、肉もたっぷり入っているし、小さすぎず大きすぎず、値段も八十円だから手頃だ。あの女がいないとき、それはつまり、平日の昼間ということになるのだが、おれはいつも中島精肉店でコロッケを買う。そのまま公園でかぶりつくときもあれば、家に持って帰って朝の残りの飯と食べることもあるし、モンプチ（という名のパン屋）で食パンを買って帰ってコロッケ・サンドにすることもある。

毎日買っていく人間に対する中島精肉店店主の無愛想ぶりもいい。お愛想を言うこともなく、おまけをくれることもない、そして、毎日真っ昼間にコロッケを買い求める三十男の素性を詮索するようなこともしない。五十近いと思われる店主は、無口で、肉屋経営にかかわりのない世の中のいっさいにまったく無関心であるように思われる。

おれの見るかぎりコロッケ売りとして一番繁盛しているのが専門店で、次が肉のワダである。中島精肉店はこの町の人間にはあまり人気がないらしい。肉屋としても、コロッケ屋としても、だ。

ところがどうやら、この町にも味覚のまともな人間がいるらしいということに、最近になってようやく気づいた。おれはいつも一時すぎに中島精肉店にいくが、このあいだ、郵便局に寄った帰り道、十二時ちょうどにいってみたら、子ども連れの女がいた。その女がこのみというわけではまったくなくて、ただ、十二時のコロッケが揚げたてでうまかったので次の日もその時間にいってみると、彼女はふたたびそこにいた。次の二日は連続していなかったがその明くる日はやっぱりいた。

おれも十二時前後にコロッケを買いにいくようにして観察してみると、どうやら彼女は平日の五日のうち三日は中島精肉店のコロッケ、もしくはメンチカツ、もしくはロースカツ、ときに牡蠣（かき）フライ、などを買い求めているようだった。

子どもは三歳くらいの男の子で、母親の衣服を片手でつかみ、つねに、「それはなんで？　なんで？　なんで？　ねえなんで？」と訊いている。つねに、だ。母親は答えるときも

あるし、無視しているときもある。どちらにしてもやつはいつときも休まず、何かを質問し続けている。

おれがこの女を観察しているのは、くりかえすが心を奪われたからでもなければ、彼女とお近づきになりたいからでもない。おれはひそかに疑っている。この女は何かしら薬物をやっている。最初に見たときからなんとなくわかった。一ヶ月もたつとその疑いは確信にかわった。今やおれは確信している。この女はジャンキーだ。そうでなければ、休むことのない子どものくそしつこい質問攻撃に耐えられるはずがない。それに目もうつろだし、ときに充血し、ときに目の下に濃いくまをはりつけている。

そのことをおれは夕食の席で慎重に女に報告する。女はビールを飲み、片手でせわしなくテレビのリモコンをいじり、箸で皿をひきずって小松菜と油揚の煮浸しをつつき、いいかげんにおれの話を聞く。

今晩の夕食の献立は、蒸し鶏の梅紫蘇ソースと小松菜と油揚の煮浸し、かぶとベーコンのサラダにわかめと豆腐の味噌汁である。このところ二キロ太ったと女がくりかえし言うので、カロリー控えめの献立にしている。女は箸をなめて蒸し鶏をいじくりつつ食べて、ふと顔をあげ、おれの話を遮る。

「ようちゃんさあ。だれが何をやってたってそんなことどうだっていいんじゃないの？　少なくとも私はどっかの主婦がくすりづけだってべつにどうだっていいけど？　それよりもようちゃん、その女に気があるんじゃないの？」

女は立って冷蔵庫から新しいビールを持ってくる。ダイニングテーブルの椅子の上であぐらを組み、缶ビールに口をつける。そんなことあるわけないだろう、おれがどうしてジャンキーの主婦に惚れなきゃいけないんだ、とおれは鼻で笑う。こういうときの言いかたは要注意だ。たとえば、どうしておれがっ！　などと声を荒らげようものなら、最悪の結果を招く。そんなふうにむきになるところがあやしい、あんたはきっとその女に惚れたのね、いいえ惚れてなければそんなにむきになるはずがない、と、女はねちねち言いはじめ、不毛な言い合い（というよりも執拗なからみ）は明けがたまで続くだろう。そして結局、女はおれのプライドやら自意識やらそんなものをことごとく粉砕するような言葉を吐いて、ようやく満足するのだ。

「ようちゃんのごはんは本当においしい。私の目のつけどころは悪くなかった」

食事を終え、たばこをふかしながら女は言う。おれは食器を重ねて流しへ運び、水道を思いきりひねって洗いものをする。背後で女が何か言うが、水音で聞こえず、おれはそのまま、何も聞こえないふりをして食器を洗い続ける。生活、とおれはそんな言葉を思いつき、口のなかで転がす。

生活。

女はおれより二歳年上で今年三十四になる。女とはじめてあったときおれは二十九で、ゲーム本をおもに扱う編集プロ

ダクションで働いていた。おれと女はつきあってすぐ一緒に暮らしはじめた。それというのもおたがいの仕事が忙しすぎて、会う時間がまったくなかったからだった。一緒に暮らしていてさえおれたちは起きている相手を見る機会がなかった。おれは十時に起きて十一時ごろ出社し、帰りは深夜の一時二時で、食品会社で働いている女は八時前には家を出て、十一時には眠っていた。土曜日もおれは会社へいっていたし、日曜は二人ともそういう病であるかのように一日じゅう眠った。

突然何かに取り憑かれたように、女が生活改善を唱えだしたのがちょうど一年ほど前だった。これでは生きている意味がまったくないと女は言った。生きている意味、だ。仕事に追われ、機械みたいに働いて、ただ老いていく、そこに私たちの生きる意志というものはまったく介在していない、と、悲痛な声で女は言った。そして続けて、まったく新しい生活をはじめてみないか、と提案した。

ちょうど今昇進の話がある、それを受ければ給料は格段に上がるがそのかわり、今の倍は忙しくなるらしい、私はそれを受けようと思う、そこで相談なのだが、あなたがもし今の仕事をどうしても続けたいというのでなければ、仕事をやめてくれないだろうか。私があなたのぶんも働く、だからあなたは家事を請け負ってくれないだろうか。私もあなたも結婚する気がない、けれど一緒に暮らすことに不便は感じていない、結婚せず一緒に暮らし、私が外で働いてあなたが家を守る、これは一種の契約のようなもので、ひょっとしたら法的な婚姻なんかにとらわれない、とても自由で新しい関係なのではないだろうか。従来の価値観、既成の結婚概念をふたりでともに打ち崩せるんじゃないか。

女は息巻いてそんなことを言い、おれはそれを帰宅後の深夜、眠い目をこすりながら聞いていて、なかなか悪くない話だ、と思ったのは事実だ。もともとおれは契約社員扱いで、残業続きでほとほと嫌気がさしていたし、実際のところ、女よりおれのほうが掃除も洗濯も炊事もうまいのではないかとうすうす思っていた、というより、彼女はそうしたことのいっさいできない女だった。

そうしてそのとき、女の声をすぐ耳元で聞きながら、新しい関係、新しい生活、新しい価値観、そんな言葉に魅了されていた。自分たちが、本当に新しい、だれもやったことのない何かをはじめることができるのではないか、という高揚感を抱いていた。

のちのち、三時近くに帰宅した男を眠らせずに何かを説得する、というのは、洗脳という手法にひどく近しいのではないかと疑うことになるのだが、そのときおれは女の言うことに全面的に賛成した。

さっそくおれは仕事をやめ、女は彼女の会社では女性初の課長だか主任だかに昇進し、おれたちはそれまで住んでいたアパートを引き払って、彼女の通勤には少々不便だが静かな郊外へと引っ越した。アパートは以前の倍は広く、家賃は以前より多少安くなった。

そしておれたちの新しい価値観に基づく新しい生活がはじまった。女は毎朝七時に家を出、夜は八時、遅いときは十一時すぎに帰ってくる。おれは彼女より早めに起きて朝食の支度をし、彼女を送りだし、洗濯や掃除をして午前中を過ごし、昼間近に散歩がてらおもてをぶらつきながら諸々の用事——公共料金の支払いだとか借りたビデオを返しにいったりだとか——をすませ、コロッケの昼飯を終えてしまうと、あとは夕食の準備以外することがない。

女が朝出ていくと、家のなかはまるで客のこない熱帯魚屋の、藻のたまった水槽みたいに静まりかえった。おれはその静けさのなかで、黙々と洗濯をし掃除をした。そのどちらも、一人で暮らしてそうしていたときより意味深く奥深く感じられた。料理はさらに楽しかった。それまで米すら炊いたことがなかったおれは、時間の余る午後、自己流で一から学びはじめた。米のとぎかた、料理におけるさしすせそとはなんぞや、千切りみじん切りの庖丁づかい、豚ロースと豚こまと豚ばらの違い、根菜と葉菜の煮かた、魚のおろしかた。はじめて作った献立は、今でも覚えている、ハンバーグ粉ふき芋添え、しらすおろし、まぐろとアボカドのサラダ、豆腐と油揚の味噌汁だ。四時間かかったが、女が以前作っていた料理よりうまかった。

おれを専業主夫にする、という女の見立ては正しかった、と言える。そうしておれも、この暮らしがそんなにいやではない。けれど、最近ふと思うようになった。昼どき、主婦と子どもでごったがえすしょぼい商店街を歩いているときとか、暗くおたくじみた男たちと一緒になってレンタルビデオ屋のアダルトビデオコーナーをうろついているとき、スーパーマーケットの、タイムサービスの鮮魚を血眼になって手にしているとき、おれは思う。

これのどこがいったい新しい暮らしなんだよ？

それははっきりした声となっておれの内側に響き、いったん響きだしたらやむことなく、いっさいのやる気が萎えていく。やる気、といってもたいした気力があるわけじゃない、せいぜい、三百六十円にしてはお得感の強いエロビデオを借りようとか、五割引きの本まぐろを我先に買おうとか、そんな「やる気」でしかないのだが。

なあ、何が新しいんだ？　自分とまったく縁のない、一年近く住んでさえいまだそう思われる、小さなさびれた町を徘徊しながらおれの内側で声は執拗にくりかえす。新しい価値観ってなんだよ？　新しい関係、法的な婚姻に基づかない自由な関係ってなんだよ？　おまえ、ただのヒモだろうがよ？と、声は言う。

そうなのかもしれない、いや、かもしれない、ではなくて、そうなのだ。おれたちのやっていることに新しいことなんか何ひとつありゃしない。都心まで電車で一時間強、昼間はジャージ姿の体型のゆるんだ主婦、夕方になれば都会をまねた似非コギャルと根性の足りない似非ヤンキー、夜は夜で腹の出た気の弱そうな男たちがうろつく、何もかもが中途半端な

この町に、新しいことがらが存在するはずもないのだ。

だいたいあの女自身新しい価値観なんて信じていなかったに違いない。おれの見るところ、女は壮絶な独占欲の持ち主なのだ。会う時間のなかった同棲中、女がおれの手帳や携帯をチェックしていたのをおれは知っていたし、帰りが遅すぎるとなじられたのも覚えている。ただそのときは、そんな嫉妬も恋愛の一要素であり、女のかわいさでもあると誤解していたが、今になってみればそれは彼女の壮絶な独占欲の氷山の一角だった。なんだかんだと理屈をつけても、本心は至極子どもっぽい単純さで、おれをただ家に閉じこめておきたかったというのが真実だろう。

新しいことなんか何ひとつない。今にいたるずっと昔から、世界各国にいるであろう無気力なヒモ男がおれで、これも無名の歴史にくりかえし登場してきたに違いない、独占欲に支配された勝ち気な強欲女が彼女で、そうして、おれたちのささやかな生活はいたるところで、うんざりされながら営まれ続けている。

浴槽の水をそのまま洗濯に使えるパイプという代物を買ってきて、洗濯機にとりつけた。ごふんごぶんと異様な音をたてて風呂水が吸い上げられていく。洗濯は一日置きにしている。二日に一度では多すぎるとおれは思うが、女の出す洗濯物の類はほんぱじゃなく多い。下着、肌着、ストッキング、シャツ、ハンカチ、一回使ったタオルは即洗濯で、枕カバーやシーツもすぐに女はかえたがる。しかも、その日の朝着たいと思ったシャツがないと信じがたいほど騒ぎたてる。だからおれは二日に一度は洗濯をする。雨でも、晴れでも、とにかく洗濯。

パイプを買いにいったときにコードレスアイロンが安くなっているのを見つけた。コードレスアイロンはずいぶんと便利だろうと思う。今度女に相談してみよう。冬のボーナスが近いから、あっさりと許可が下りるに違いない。

洗濯物を干し終えたのが十一時半で、おれはあわててパーカをはおり買い物に向かう。昨日女は中島精肉店にきていなかったから、たぶん今日はくるだろう。

おもては曇りで、昨日よりいくぶん寒くなったようだ。アパートを出てふりかえると、白いタイルばりの建物の、こちらをむいたベランダがみな曇り空を映して、建物全体もどんよりと見えた。ワンフロア四世帯、五階建てのアパートなのだが、洗濯物を干しているのは一軒だけだった。見慣れたものが風にひるがえっていると思ったら、自分の部屋のベランダである。それが自分の部屋である、と気づいて、おれはなんとなくいやな気分になった。理由をだれかに訊かれてもきっと説明できないが、犬の糞をおもいきりふんだような気分だった。

今日はついている。いつも肉屋の店先で会うだけの例の女が、商店街の薬屋から出てきて、おれの前を歩いている。いつものように右手の先に子どもがいる。子どもは素っ頓狂な

声で童謡めいた歌をうたっている。一小節うたっては母親を見上げ、頼りなく声を弱め、母と目をあわせてはまた力強く次をうたいだす。あとをつけているわけではないんだ、たまたまいく方向が一緒なのだと（実際そのとおりなのだが）体全体で主張しながらさりげなくおれは女の背後に近づく。女が細い声で、子どもの歌声にハミングを合わせているのが聞こえる。女のハミングは、調子外れで、心もとなく、しかしなんとなく偽物くさい幸福感に満ちて聞こえ、やっぱりこの女は何か薬物を摂取しているに違いないとおれはさらに確信を強める。以前読んだり聞いたり、あるいは若い時分に好奇心で手を出したドラッグ類を思い浮かべ、女の姿にあてはめてみようとする。

雰囲気から言ってS系ではないだろう。マリワナか？　ハシシだろうか？　それともマッシュルーム？　Lか？　なんにしても、子持ちの主婦がいったいそんなものをどのようにして手に入れているのだろう？　いや、ひょっとしたら合法的な既製品できめる方法を彼女は知っているのかもしれない。薬屋で買って左手にさげているビニール袋の中身はそれかもしれない。

商店街の電柱にはすべて、安っぽいビニールの花が飾られていて、ところどころに備えつけられたスピーカーからは、妙に平べったい声で商店街の今日のお買い得品がアナウンスされ、聞いたことのないポップス調の曲がかかっている。愚連隊とひそかにおれが名づけている若妻集団――みな似たような髪型、似たような服装をして、同じようなベビーカーを押して何が安いだの旦那がどうのだのとわめきながら歩いている女たちとすれ違い、道端でしゃがみこみ泣き叫ぶ子どもを叱る母親を通りすぎ、下駄屋の軒先で輪を描いて話しこむ背中の丸い老婆たちをすぎ、狭い一方通行の道にねじりこむようにして走る乗用車をよけて、おれは女とつかず離れずの距離を保ちつつ進む。女は、いっさいと切り離されているように見える。アナウンスともベビーカーともつぎはぎだらけのアスファルトとも、いや、右手の先の子どもからも切り離されて、ただ一人、見知らぬ場所をさまよっているみたいに見える。

こんな人間を見たことがある。何もかもとかかわりを持たずに、ただそこに、現実という場所に一人漂って、そうしながら、自分が何からも切り離されているということにまったく気づいていないようなやつだ。

その男は小学校に向かう途中にある、神社の裏手の墓地に住んでいた。そうしてその男をおれは約一年のあいだ、飼っていた。犬を飼うみたいに、餌をやり、名前をつけ、手なずけ、飼い慣らした、おれはそう思っていた。

おれはそのとき小学校の四年で、転校してきたばかりだった。友達がおらず、だれかが友達になってくれる気配もなく、かと言って前にいた学校で仲のいい子どもがいたかといえばそんなこともなくて、ああおれは一生こうなんだろうと子どもなりに絶望していた。学校へいく道、家を出て住宅街を通って竹林を抜けて、いつもひとけのない大きな公園をすぎ、神社をすぎて廃車工場を横目に見ながら歩く三十分ほどのその道を、朝いって帰りに戻るという単純往復をくりかえしていると、なんだか絶望の渦をどんどん下降していくように思えた。

通り沿いに鳥居だけあってそこから続く細い道を進んだところにある無人の神社は、悪霊が棲んでいて足を踏みいれると取り憑かれるというくだらないうわさ話のもと、めったに子どもは寄りつかなかった。おれはときおり、登下校の際にそこに忍びこんでは、荒れた境内でしゃがみこんだり賽銭箱に手を突っ込んだりして、永遠に思われる絶望の渦から逃げおおせた気分を味わっていた。

本殿の裏に男が棲みついていることに気づいたのは、神社で時間をやりすごすようになってすぐだった。神社と墓地のあいだに男は青い小さなテントをはって、そこで寝起きしているらしかった。醤油で煮染めたような作業着姿で、絡まりあった蛇みたいな髪を輪ゴムで縛っている男は、けれど間近で見るとずいぶん若いように感じられた。大人の年齢なんてものは当時のおれにはまったくわからなかったが、父親よりも、担任の山崎先生よりも若く見えた。

登校時間より早めに家を出ると、男はいつもテントのなかで寝ている。めったに人のこない墓地は静まりかえり、朽ちて黒ずんだ墓石は眠るように立ち並び、明けがたの金色じみた光に染められ、墓地の奥の竹林は微細な豆電球みたいにちかちか光っていた。あるときおれはテントの前に朝食の残りを詰めたタッパーを置いておいた。ウインナや、たまご焼や、トマトやロールパンなんかだ。下校時墓地にいってみると、本殿の裏、柄杓や樽が転がった水道のところに、洗ったタッパーが置いてあった。おれはあたりを見まわした。男は墓地のなか、墓石と墓石のあいだに背を丸めあぐらをかいて座り、ぼんやりと空を見ていた。おれは足を忍ばせて青いテントに近寄り、朝と同じ場所に、ティッシュでくるんだ給食の残り――バナナとコッペパン、おれの嫌いな牛乳――を置いた。

その日からおれは足繁く墓地に通いはじめた。夕食前にこっそり家を抜け出して、缶詰だの果物だのスナック菓子だのを持っていくこともあった。黒田。男におれはそう名づけた。登校時、黒田はいつもテントのなかで眠っていて、下校時、黒田は墓地の中を歩いたり、本を読んだり、薄汚いふとんを墓石に干したり、地べたに座って空を見ていたりした。おれに気づいているのかいないのか、こちらにかまうようすはまるでなかった。

餌をやりはじめてから三ヶ月ほどして、おれははじめて黒田を間近で見た。明けがた、朝食の残りをいつものようにテントの前に置くと、いきなり黒田がテントから顔を出したのだった。黒田はおれを見て、唇を横に広げてにっと笑った。目が痛くなるほどすえたにおいがし、黒田の、黄ばんだ大粒の歯が見えた。

そうしておれと黒田はたがいを認識しはじめた。明らかに黒田はおれの与える食事を待っていた。だから、おれは夕食後も家を抜け出して、我慢して食べ残したおれの夕食を彼に与えた。夕食の残りが一番豪華で、黒田もそれを一番喜んでいるように見えた。下校時、黒田が本を読んでいるとなりでおれは漫画本を読み、黒田がふとんを干している横でおれは零点に近いテスト用紙を燃やした。下校時間が以前より遅くなったのは友達ができたからだと勘違いして母親はうれしそうだった。黒田はまったくしゃべらなかった。しゃべることができないのかと思ったが、そうではないとすぐに思いなおした。黒田はしゃべることをやめたのだ。放棄したのだ。おれはそう思った。黒田とおれは、だから一言も言葉を交わさなかったが、おれは黒田を飼い慣らした気分になった。くさくて不潔でしゃべらない黒田は、おれの与える餌がなければ死んでしまうんだと思っていた。

五年にあがるころおれは処世術というのか社交性というのか、とにかく人の輪に入ることをだんだんと学びはじめ、一人二人だが友達もでき、人と遊ぶということがどんなものか知るようになり、彼らがしたり顔で連れていってくれる隠れ家や駄菓子屋は黒田のいる墓地ほど興奮的ではなかったが、それでも、そういう退屈を享受しないとおれは何か大きく道を踏み外すとうすうす理解していて、気がつくと墓地から足は遠のいていた。遠のいてしまうと、今度は時間があっても墓地へいけなくなる。餌を与えるという役割をおれは投げ出したのだ。黒田は死んでいるかもしれず、おれをうらんでいるかもしれなかった。それがこわかった。それきり墓地へいくことをやめた。墓地へいかないと、墓地へいっていたときよりずっと多くの時間、黒田のことを考えるようになった。

そんなふうにして黒田のことを考え続けて中学にあがり高校生になると、神社の裏に墓地があって、そこに浮浪者が棲みついていたこと、自分がその男を飼っていたことが、おさない空想であるかのように感じられはじめた。

高校二年の夏休み、おれは思いきって墓地にいってみた。小学校を卒業して以来足を向けたことのなかったかつての通学路を歩き、竹林がなくなっていたり公園がそれほど大きくないことに驚いたりし、頼りなげな鳥居をくぐる。改装されたのか神社は記憶のなかのそれより格段にきれいで、そういう時期だったのだろう、幾人かが墓参りにきていて墓地はにぎやかだった。黒い服を着た人々は談笑しながら墓石を磨き、あちこちの墓前にはまだ色あざやかな花が供えられ、線香の煙が夏の陽射しのなかで白く漂っていた。男がテントをはっていた場所には焼却炉があって、銀の焼却炉からは黒味がかった煙がひっきりなしに流れていた。ああやっぱり、とおれは思った。ああやっぱりあれはおれの空想だった。友達ができずいじいじと境内に腰かけて、一人の男を自分が飼うという空想を、おれは微に入り細を穿ち――それが現実味を帯びてくるほどまでに肉づけしたのに違いない。そして墓地をあとにしようとしたとき、バケツや柄杓が置いてある外水道の

片隅に、見覚えのあるタッパーがひっそりと転がっているのを、おれは見つけた。まるでひからびた昆虫の抜け殻みたいに。屍骸みたいに。

ビデオ屋にはられたアニメ番組のポスターに反応して、子どもは立ち止まり女の手を引く。女はぼんやりと立ち止まり、子どもの伸ばした指の先を見ている。おもちゃみたいに小さな子どもの指の先にはドラえもんのポスターがあり、子どもはそれを見てひとしきり何か言う。女は幾度かうなずいて子どもの声に耳を傾けているが、おれにはわかっている。女が見ているのはドラえもんでものび太でもない。ガラス戸ごしのビデオ屋の店内でもなければ店内で流れている新作ビデオでもない。

女と子どもが立ち止まっているからおれとの距離はどんどん縮まる。だってだってドラえもんがねえー、こないだパパが映画をねえー。子どもの声が聞こえる。うん、うん、そうなの、へええ。女の声が聞こえる。おれは立ち止まるきっかけをつかめないまま二人を通りすぎる。

コロッケ屋でおれが勘定をすませた直後、案の定子どもと女は中島精肉店にやってくる。たまご焼は？　たまご焼はママ？　たまご焼はないのよー、うーんとね。牡蠣フライを五個、コロッケ二つ、あとそのポテトサラダ二百グラムくださいな。間の抜けた女の声が背後でする。おれは中島精肉店の向かいにある本屋で立ち読みするふりをしながら、彼女たちが肉屋から出てくるのを待つ。

家を出たときは曇っていたのに、雲の合間から青空が見えはじめている。商店街の街灯にくくりつけられたビニールの花が風にあおられてせわしなく音をたてる。女と子どもが肉屋から出てくるのが本屋のショーウィンドウごしに見え、おれはふたたびあとをつける。

八百屋で林檎（りんご）とキャベツ、ねぎと白菜を買い、お菓子屋の前で子どもに手をひかれて数秒立ち止まり、ふらついたように見える足取りで商店街を抜け、女は橋をわたる。途中ふたたび立ち止まり、欄干にもたれて川をのぞきこんでいる。バスが通りすぎ、バイクが通りすぎる。

この橋をわたったことがおれはない。橋の向こうは住宅街が広がるだけで、おれには用がないのだ。女がふたたび子どもとともに橋を歩きはじめ、それについておれも橋に足を踏みいれた瞬間、未知の場所へ向かう子どもみたいな気分を味わう。この町に、いや、この世界に未知と呼べるものなんかないとうに知っているくせに、まるで、そうだ、神社の裏で黒田を見つけたときの気分を思い出している。

間口の狭いたばこ屋があり、シャッターをおろした店があり、似たような造りの家が並び、申し訳程度の小さな公園がある。公園と向き合うようにして建つマンションに女は入っていく。リリエン・ハイムと入り口に書かれている。おれは最初からそういう目的だったようにマンション前の公園に入り、ペンキのはげた象の遊具に腰かけて、中島精肉店のコロ

ッケを食べる。女は三階の廊下をまっすぐ進んで、一番奥の部屋に向かう。玄関前で子どもが帰りたくないとぐずる。女は半ば力ずくで子どもを部屋にひきずりこむ。扉は閉められ、あたりは静まりかえった。

一個目のコロッケを食べ終えておれは、女に対しての興味を急激に失っていることに気づく。築五年ほどの六階建てマンションの、三階の角部屋で女は、おそらくごまんといる主婦たちと似たり寄ったりの暮らしをくりかえしているに違いない。ここにいるおれとまったく同じように。ただのとろくさいあほ面が、薬物で酩酊しているように見えただけだ。女はきっと扉の向こうで、買ってきた惣菜を器に移しかえることもせず、子どもとむさぼり食っているのだろう。

けれどおれは象の遊具から立ち上がることができない。二個目のコロッケもとうに食べてしまったというのに、女が消えていった扉を凝視している。

おれは唐突なあざやかさであの墓地を思い出す。見知らぬ死者の眠る墓と、雑草のへばりついた地面と、合間から陽の帯を落とす木々に囲まれている、しゃべることも生活することも放棄した浮浪者と、入りこむべき現実の隙間を見つけられずにいる小学生の姿が、くっきりと見える。おれはリリエン・ハイムの扉を凝視しながら墓地の光景を追い、今日の夜はすき焼きにしようと唐突に思いつく。

（『トリップ』　光文社　二〇〇四・二）